

－ 資 料 －

栄養教育・指導論実習における食育媒体の製作に関する考察  
－認定こども園職員による自由記述評価の分析から－

平田 庸子\* 園田 雪恵\*\* 境田 可奈子\*\*\*

Consideration of Food Education Material in Nutrition Education and Practice Teaching:  
From the Free Descriptive Analysis by Nursery Teachers

Yoko HIRATA Yukie SONODA Kanako SAKAIDA

要 旨

栄養士養成課程科目である「栄養教育・指導論実習」の授業改善を目的として、学生が製作した幼児を対象とした食育媒体の適否について、保育現場で働く認定こども園職員（保育士、管理栄養士、栄養士、看護師）に自記式アンケートおよび自由記述による調査を行った。

その結果、対象年齢が2歳児の食育媒体に対して発育・発達に関する項目と安全への配慮に関する項目で、4歳児以上に比べて有意に評価が低かった。改善点について自由記述における計量テキスト分析を行ったところ、2,3歳児では媒体の大きさを手の大きさに合わせるなど子どもの発育・発達に関する配慮が不足していることが明らかとなった。また、素材の選択についても工夫が必要であることが分かった。4歳児以上は子どもの興味関心を集める媒体であると評価された。子どもが楽しく遊びながら学ぶことができる食育媒体の製作には、幼児期の発育・発達への理解を深める必要性があると考えられた。

キーワード：幼児 食育媒体 栄養教育 栄養士養成 保育士との連携

1. 緒言

子どもの発育・発達において、幼児期に好ましい食習慣を身につけることは非常に重要なことである。また、この時期に身につけた食習慣は、生涯にわたる心身の健康を保つための基盤となると考えられている。幼児期の食育については、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領で、「食育の推進」として食を営む力の育成にむけてその基礎を培うことを目的とすると示されている<sup>1,2)</sup>。また、幼稚園教育要領「健康」の領域には、食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であると明記されている<sup>3)</sup>。2005年に食育基本法が制定されて以降、これまでに子どもを取り巻く多くの場面で様々な食育が実践されている<sup>4)</sup>。しかし、近年の急速な社会状況の変化に伴い、朝食の欠食や食の乱れによる健康への影響など、子どもと

---

\* 神戸女子短期大学 \*\* 神戸教育短期大学 \*\*\* 社会福祉法人山善福祉会

食の問題に関する課題は少なくない<sup>5)</sup>。したがって、子どもの食育を進めていくうえで、保育の現場がこれまで以上に重要な役割を担うことになると考えられる。

2017年の保育所保育指針及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改定の中では、食育の計画に関して、第3章健康および安全において、「栄養士が配置されている場合は、専門性を生かした対応を図ること」と、新たに明記された。これは保育所及び認定こども園における食育計画をより充実させるために栄養士の専門性の活用が求められていると言える<sup>1)</sup>。したがって、食育の推進には、栄養士・管理栄養士をはじめ、保育士や保育教諭など子どもの身近にいるスタッフ一人ひとりがその専門性を活かして連携していかなくてはならない。

保育所における「食」に関する現状と栄養士への要望について調査した西尾ら<sup>6)</sup>は、栄養士に対して「給食・献立の充実」の他に「子どもや保護者とのかかわり」「多職種との連携」を望む声が多くあったことを報告しており、栄養士に対して給食の提供だけでなく日常的な子どもとのかかわりを期待している。また、鎌田ら<sup>7)</sup>が調査した新人保育所栄養士の仕事上の悩みに着目した研究では、新人保育所栄養士の困っていることあるいは不安に感じていることの中で「乳幼児の身体的発達についてわからない」や「幼児期の心理・社会的発達についてわからない」という項目が有意に高かったと報告している。これらの報告から子どもの食育を推進していくためには、栄養士が乳幼児の身体的発達や心理社会的発達について十分に理解し、日常的に子どもとの関わりを深めていくことが重要であると考えられる。

本学の栄養士養成課程（食物栄養学科）では、ディプロマポリシーのひとつに「食育の実践に必要となる知識・技能を身に付けている」と定めている。栄養士養成課程カリキュラムの中で、栄養教育・指導論実習は必修科目であり、2年次生科目として位置付けられている。本授業の到達目標は、「対象者のニーズに合わせた栄養教育指導法を理解し、食と健康に関する課題を解決する能力や判断力を身につけることができる」「食育の実践に必要な知識を学び、適した栄養教育媒体を作成することができる」とし、保育所や幼稚園での食育をテーマに栄養教育の企画や媒体の製作を行っている。

幼児の食育としては、多くの保育園や幼稚園で、野菜の栽培や米作りなど、地域と連携した活動やクッキングなどが食育実践例として報告されている<sup>4,8)</sup>。しかし、これらは年間行事として計画されたものが多く、日常的な保育の中で活用できる食育教材について検討されたものは少ない。よって、毎日の園生活の中で遊びを通して、幼児期にふさわしい体験ができるように子どもが毎日身近に遊ぶおもちゃを食育教材として開発する必要があると考えた。

そこで本実習では、幼児を対象に毎日子どもが遊びながら学ぶことができる食育媒体（食育おもちゃ）の製作を行った。さらに実際に製作した食育媒体が、保育の現場でどのように活用できるか認定こども園職員からの意見を聞き、課題や改善点などを検討し、今後の栄養教育・指導論実習の授業改善にいかすことを目的として、現場で働く認定こども園職員（保育士・管理栄養士・栄養士・看護師）を対象にアンケート調査を実施した。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

調査対象者は、近畿圏内にある認定こども園に勤務する職員24名（保育士21名、管理栄養士1名、栄養士1名、看護師1名）である。平均の勤務年数は、10.0±8.02年であった。調査に際しては、目的や内容について口頭および書面にて説明し、承諾の得られた者に対して、無記名の自記式アンケート（自由記述を含む）を行った。なお、アンケートの回答は任意であり回答の提出をもって同意を得たものとするを明記した。

### 2.2 食育媒体について

食育媒体は、本学の栄養教育・指導論実習の中で学生が製作した物の中から、著者らが子どもが楽しく遊べると思われるものを選んで、学生自身が想定した対象年齢別に2歳児、3歳児、4歳児以上についてそれぞれ3作品を使用した（表1）。

製作に関して、授業の中で対象者（幼児）のニーズに見合ったものになるように以下の3項目について指導した。①保育園や幼稚園における子どもの活動や生活を事前に調べたうえで製作すること、②発達・発達に見合ったものにする、③安全面への配慮を行うこととした。

表1 食育媒体（食育おもちゃ）のテーマと素材

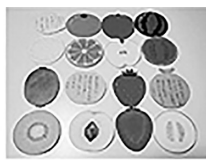
対象年齢	テーマ	素材	遊び方
2歳児	野菜の絵合わせカード（写真1）	牛乳パック	野菜の絵が書かれた2枚のカードを探して形を合わせて遊ぶ
	円柱野菜パズル	ロールペーパー芯	円柱状のペーパー芯に書かれた野菜の絵を合わせて、積み木のように組み立てて遊ぶ
	栽培カード	画用紙 折り紙	画用紙に書かれた木の枝や土の部分に野菜や果物の絵を合わせて遊ぶ
3歳児	野菜のシルエットパズル（写真2）	段ボール	野菜のシルエットにあわせて適した野菜のパズル（9ピース）を合わせて遊ぶ
	おにぎりトランプ	紙	おにぎりの形のトランプ 中身の具を合わせて遊ぶ（神経衰弱）
	野菜すごろく	画用紙	野菜の絵をすごろくのマスに見立てて遊ぶ
4歳児	果物カルタ（写真3）	色画用紙	果物の形に画用紙を切り抜き、絵を書き読み札と取り札に分けてカルタとして遊ぶ
	三色食品群色分けゲーム	ティッシュボックス	三色に色分けされたボックスに三色食品群に合わせて食材を分けるゲーム
	パクパクアニマルゲーム	空き箱 色画用紙 紙	空き箱のふたを動物の口に見立てて、ボール状に作った食材（野菜など）を入れて遊ぶ



(写真1)



(写真2)



(写真3)



展示の様子

なお、材料は家庭にある材料（牛乳パックや空き箱など）を使用した。

## 2.3 調査内容

調査方法は、食育媒体を園に1週間展示し、認定こども園職員に実際に手に取って見てもらい、それぞれに対する評価を得た。自記式アンケートの質問項目は①対象年齢の発育・発達に適していると思いますか、②安全面が配慮されていると思いますか、③子どもの興味関心を集めると思いますか、④楽しく遊べると思いますか、⑤このおもちゃによる食育効果はあると思いますかの5つの項目について、「とてもそう思う（5点）」、「そう思う（4点）」、「どちらでもない（3点）」、「そう思わない（2点）」、「全く思わない（1点）」の5段階評価で回答を得た。また、それぞれの食育媒体の良かったところや改善点について、自由記述（200字程度）による評価を求めた。

## 2.4 分析方法

アンケートの結果は、5件法の評価スケールについて、2歳児、3歳児、4歳児以上の3群間で比較検討した。分析は、Friedman検定を行い3群間に主効果が見られた場合は、Bonferroni法を用いて多重比較を行った。有意水準は5%とし、解析には統計解析ソフトSPSSver.23.0を用いた。自由記述の計量テキスト分析には、KH Coder version3.Alpha.17eを用いて、抽出された語の頻出語と共起ネットワークの分析を行った<sup>9, 10)</sup>。

## 3. 結果

### 3.1 アンケート結果について

アンケート結果を表2に示した。①対象年齢の発育・発達に適していると思いますかの問いについて、2歳児、3歳児、4歳児以上の3群間で有意な差異がみられた。事後検定では、2歳児は、3歳児、4歳児以上に比べて有意に低い結果であった。特に2歳児では、平均点が2.54±1.06点とアンケート全体で最も低かった。②安全面が配慮されていると思いますかの問いについても同様に3群間で有意な差異が見られ、2歳児は4歳児より有意に低かった。③子ども

表2 年齢別食育おもちゃに媒体（食育おもちゃ）についてアンケート結果（n=24）

項目	2歳児	3歳児	4歳児以上	Friedman 検定	Bonferroni 事後検定
①対象年齢の発育発達に適していると思いますか。	2.54±1.06	3.42±0.72	3.75±0.99	p < 0.001	2歳児 vs. 3歳児 p=0.035 2歳児 vs. 4歳児 p=0.001
②安全面が配慮されていると思いますか。	3.54±0.83	3.67±0.64	4.17±0.64	p=0.003	2歳児 vs. 4歳児 p=0.042
③子どもの興味関心を集めると思いますか。	3.50±0.88	3.83±0.76	4.04±0.75	p=0.022	n.s.
④楽しく遊べると思いますか。	3.25±0.90	3.54±0.88	3.83±0.92	p=0.017	n.s.
⑤このおもちゃによる食育効果はあると思いますか。	3.42±1.06	3.79±0.66	3.92±0.65	p=0.056	n.s.

の興味関心を集めると思いますかと④楽しく遊べると思いますかについては、3群間で有意な差異が見られたが、事後検定では各群に有意な差異は見られなかった。⑤このおもちゃによる食育効果はあると思いますかについては3群間で有意な差異はみられなかった。全体で得点が高かった項目は、4歳児の②安全面が配慮されていると思いますか(4.17±0.64点)と②子どもの興味関心を集めると思いますか(4.04±0.75点)という項目であった。

### 3.2 自由記述の計量テキスト分析結果(頻出語)

自由記述の計量テキスト分析の結果、抽出された語について、抽出回数の多い上位40語を表3に示した。

2歳児では、「思う」(54回)、「2歳児」(26回)に続き、「絵」(19回)が最も多く、次いで「難しい」(17回)であった。「思う」については、3歳児、4歳児以上でも1位であり、文の末尾につながる語として以下除外した)。次に「絵」の語の使われ方を見ると、「絵を大きく左右対称の野菜や果物にする」「2歳児のおもちゃとして見てわかりやすい絵やカード、簡単なカルタは楽しむことができる」と記述されていた。また、「難しい」については、「2歳児が理解するには難しいと感じた」とあり、続く「理解」や「分かる」につながっていた。また、「優しく握る操作が難しい子どもがいる」「円柱パズルの合わせが難しい」と記述されていた。一方、「良い」(14回)は、「アイデア」、「安全」など「作り方がとても丁寧であり良いと感じた」や「角を丸くするなど安全に配慮されている点良かった」とあった。また、「牛乳パックは、フェルトや画用紙で覆うと良い」「手にそう大きさが良い」との記述があった。

表3 食育媒体(食育おもちゃ)の良かったところや改善点について自由記述(頻出後の出現回数)

2歳児				3歳児				4歳児以上			
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	54	子ども	5	思う	50	サイコロ	4	思う	56	断面	5
2歳児	26	立体	5	野菜	19	テーブル	4	良い	19	箱	5
絵	19	アイデア	4	分かる	17	マス	4	色	14	面白い	5
難しい	17	カタカナ	4	楽しめる	12	歳	4	楽しい	10	イラスト	4
野菜	14	バージョン	4	難しい	12	食材	4	作る	9	形	4
良い	14	安全	4	良い	12	年齢	4	カード	8	考える	4
見る	13	育つ	4	絵	10	破れる	4	絵	8	使える	4
分かる	10	果物	4	楽しい	8	面白い	4	楽しめる	8	子	4
文字	9	楽しい	4	紙	7	遊び	4	食べ物	8	取る	4
理解	9	合わせる	4	色	7	遊べる	4	文字	8	増やす	4
興味	8	使う	4	神経衰弱	7	カード	3	入れる	7	読み札	4
感じる	7	持つ	4	感じる	6	トランプ	3	野菜	7	読む	4
色	7	実際	4	興味	6	意識	3	遊ぶ	7	難しい	4
楽しめる	6	手	4	具材	6	影	3	遊べる	7	遊び	4
入れる	6	出来る	4	作る	6	果物	3	感じる	6	カルタ	3
必要	6	食育	4	薄い	6	見る	3	子ども	6	ボール	3
もう少し	5	大きい	4	形	5	工夫	3	小さい	6	意識	3
形	5	断面	4	使う	5	子	3	食材	6	栄養素	3
工夫	5	可能	3	アイデア	4	写真	3	大きい	6	覚える	3
作る	5	楽しむ	3	ゲーム	4	出来る	3	果物	5	見る	3

3歳児では、「野菜」(19回)、「分かる」(17回)、「楽しめる」(12回)が上位に抽出された。「野菜」では、「なじみのある野菜が題材となっており子どもの興味を引きそう」「いろいろな形や色の野菜を意識できるのは良いと思う」など「良い」につながっていた。次の「難しい」(12回)は、「すごろくは3歳児には難しい」「サイコロが難しい」といった記述があった。「楽しめる」(12回)では、「神経衰弱は好きな子どもが多く楽しめると思う」「野菜パズルは楽しめると思う」「難易度をあげていくと長く楽しめる」とあった。また、素材についての改善として、「薄い紙ではなく、ふわりとしたものが触って楽しめる」「色塗りなども楽しめる」などの記述があった。

4歳児では、「良い」(19回)、「色」(14回)、「楽しい」(10回)が上位に抽出された。「良い」は、「果物カルタは良いと思う」「言葉を用いて考えるということは良いと思った」「色や形など丁寧に作られていて良いと思う」「果物の断面を伝えていく食育は良いと思う」と記述があった。「色」については、「果物カルタは色も形もきれいで楽しく遊べると思う」と「三色食品群は色分けのルールについて子どもに教えると楽しめると思う」など「楽しい」につながっていた。また、「3チームに分かれて遊ぶと楽しく遊べる」、「子どもも楽しく遊びながら食育できる」などの記述があった。

### 3.3 良かった点や改善点についての共起ネットワーク分析結果

自由記述における抽出語の出現頻度と抽出語同士の関連性について分析した。

2歳児の共起ネットワーク分析結果を図1に示した。2歳児では、大きく5つのサブグラフが示された。頻出回数の多い抽出語を含むAのグループでは、「思う」「難しい」「絵」「野菜」などが共起している。記述例を見ると「2歳児には難しい」「2歳児が合わせるのは難しい」とあり2歳児対象の媒体として、難易度に対する指摘があった。Bグループは「見る」「分かる」「楽しむ」「文字」「物集」「ない」などが共起している。Cグループは「作る」「立体」「使う」「感じる」などが共起している。D、Eグループでは、「良い」「安全」「口」「入れる」「可能」とあり、安全性について、「角を丸くするなど安全に配慮されている」「年齢的に構造も安全である」と記述されていた。また、

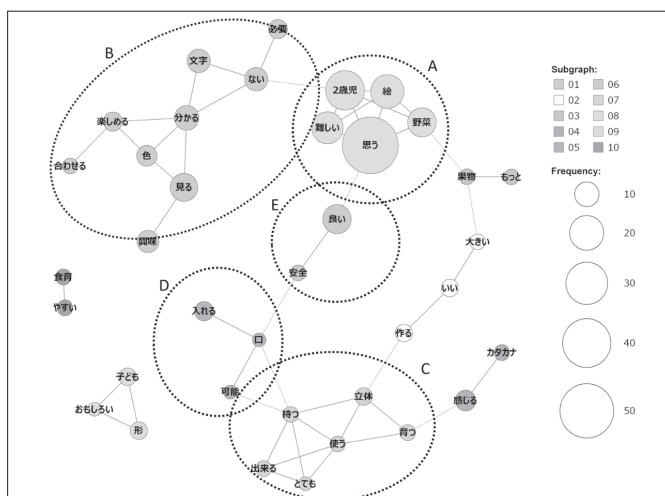


図1. 2歳児の共起ネットワーク



た、「口に入れる可能性がある」「マスキングテープなど使用すると良い」など衛生面や素材について記述があった。

3歳児の共起ネットワーク分析結果を図2に示した。3歳児では、大きく4つのサブグラフに分けられた。Aグループは、「難しい」「楽しめる」「神経衰弱」「出来る」「分かる」「野菜」が共起しており、「神経衰弱が好きな子も多く楽しめると思う」「野菜パズルは楽しめると思う」「難易度をあげていくと楽しめる」などとあった。一方、「サイコロは難しい」「すごろくは難しい」とあった。3歳児では、神経衰弱のような記憶力ゲームなどは楽しめるようになるが、サイコロなどの道具とルール

を結びつけることが難しいということが記述されていた。Bグループは、「破れる」「紙」「薄い」「テープ」が共起していた。Cグループは「良い」「絵」「面白い」「楽しい」「遊べる」とあり、「野菜を意識できるのは良い」「アイデアが良い」「題材選びが良い」など媒体の遊びやすさなどを表していた。Dグループは、「トランプ」「ゲーム」「興味」「具材」「理解」が結びついており、「子どもの興味を引きそうである」「ゲームにした方が興味を持つ」や「書かれている具材を大きく書くと理解しやすい」などの記述があった。

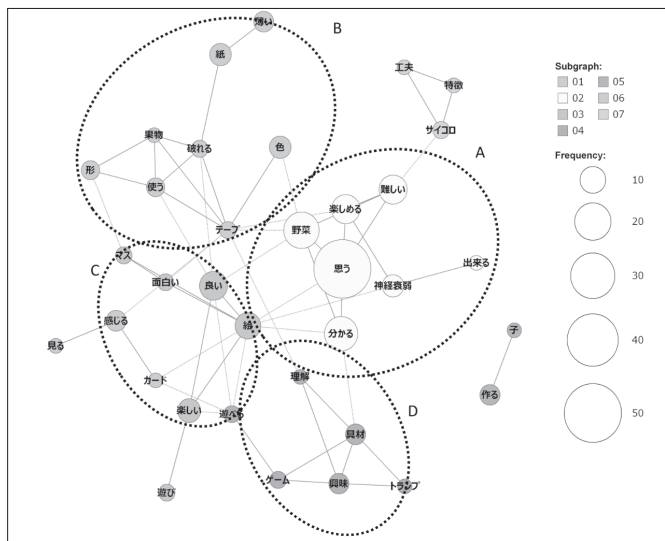


図2. 3歳児の共起ネットワーク

4歳児の共起ネットワーク分析結果を図3に示した。4歳児は大きく4つのサブグラフに分けられた。Aグループは「良い」「思う」「食べ物」「箱」「入れる」が共起していた。「カルタは良い」「言葉を

断る

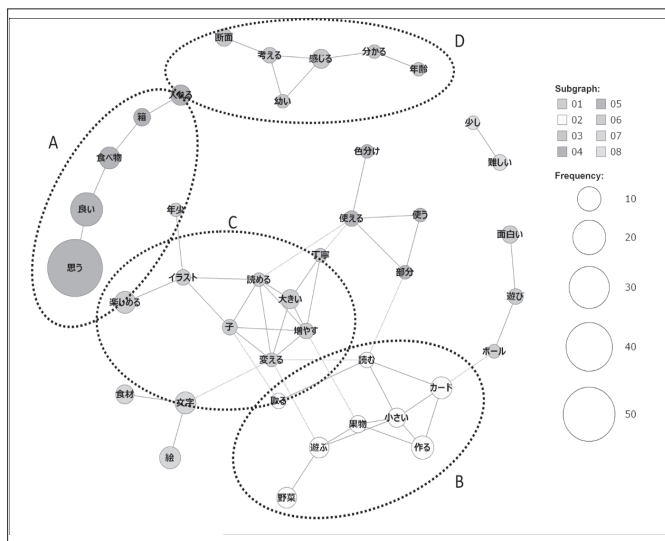


図3. 4歳児の共起ネットワーク

用いて考えるのは良い」「丁寧に作られていて良い」「箱に入れるのは学びながらできてよい」と評価されていた。Bグループは「カード」「読む」「作る」「小さい」「果物」「遊ぶ」など「もっとたくさんの食材を作ると良い」「野菜のボールが小さくて入りにくい」など食材の数を多くすることや、ボールの大きさなど工夫するとよいなどが記述されていた。Cグループは「読める」「大きい」「増やす」が共起しており、4歳児になると文字を読める子も増えてくることやカルタやカードの数を増やすと良いなどが記述されていた。Dグループは「考える」「感じる」「分かる」「年齢」とあり、「子どもにもわかりやすいように作られていると感じた」「イラストが本物のように美しく子どもの興味を引くと感じた」「年齢的に幼く感じる」といった記述があった。

#### 4. 考察

本研究では、栄養士養成課程科目である栄養教育・指導論実習の中で、学生が製作した幼児期の食育媒体の適否について、今後の授業改善に役立てることを目的として、認定こども園の職員（保育士、管理栄養士、栄養士、看護師）にアンケート調査を行った。

その結果、5件法による評価では4歳児以上を対象とした食育媒体では、安全面への配慮や子どもの興味関心を集めることについての項目で評価が高かった。一方、2歳児対象の食育媒体では、発育・発達についてと安全面への配慮についての項目で低い評価であり、対象年齢が低いほど幼児に適した食育媒体を作ることが難しいことが明らかとなった。

次に自由記述について、計量テキスト分析を行い具体的な改善点や今後の課題について検討した。その結果、2歳児で、食育媒体の製作にあたって発育・発達への理解と安全面への理解を深めることが課題であることが明らかとなった。

食育媒体の製作にあたっては、①保育園や幼稚園における子どもの活動や生活を事前に調べたうえで製作すること、②発育・発達に見合ったものにする、③安全面への配慮を行うことを授業の中で指導した。しかし、発育・発達への理解については、幼児期の年齢に合わせた違いを改めて指導する必要があると考えられた。特に2歳児のような低年齢では、手に合わせた大きさや形状にすること、手に持った時に握りやすい形になるように工夫することなど身体の発育に合わせたものにするのが重要である。また、興味や関心を集めるためにシンプルなイラストや色使いが分かりやすく、文字は使わず見ただけで野菜の絵や果物の絵であるとすぐに理解できるようにすることが大切であることが分かった。幼児期は、年齢によって発育・発達に大きな違いがある。したがって今後、学生が幼児の発育・発達に対する理解を深めるために、毎日の園生活を観察できる機会や、画像などを使って、分かりやすくするような授業改善が必要である。さらに、媒体に使用する素材の選択について、配慮が必要であることも指摘があり、子どもが楽しく遊べるような媒体を作るうえで、低年齢ほど素材の工夫が重要であることが分かった。今回の媒体の製作にあたっては、家庭にある材料を利用して製作したため、



空き箱や牛乳パックなど紙の素材で作られたものが多かった。しかし、布やフェルトなどを使っ  
てはどうかというアドバイスがあり、「触れる」という幼児の五感を刺激できるような素材の  
工夫も必要であることが分かった<sup>1, 2)</sup>。その他「聴く（音）」など、子どもの五感を刺激する  
ような改善が必要であると考えられた。

安全面では、切り口をテープで巻いておくことや角を丸くするなど、怪我を防ぐための注意  
はできていた。しかし、2歳児では、興味のあるものを口に入れることがあるため、衛生面で  
の配慮が必要であると指摘があった。また、遊んでいるおもちゃを口に入れることは、年齢が  
低い子どもほど誤飲の危険性がある。2017年の消費者庁の資料である「消費者安全法第23条第  
1項の規定に基づく事故等原因調査報告書概要玩具による乳幼児の気道閉塞事故」では、次の  
ような調査結果が示されている。玩具を「誤嚥した」経験を持つ子どもの保護者に回答を求め  
たところ、約30mm以下の玩具を、3歳未満の子どもが誤嚥している傾向が認められた。この調  
査から、2歳児は、口に入れることが可能な大きさの媒体であれば、誤飲する危険性が高い<sup>1)</sup>。  
2017年改訂の保育所保育指針では、事故を未然に防ぐためには、安全面の配慮が重要とされて  
いる<sup>1)</sup>。今後の学生への指導としては、このような起こりうる事故について検討の機会を設け、  
事故防止の視点を持って食育媒体の製作できるようにしていきたい。

3歳児の媒体については、野菜の形や名前を覚えるパズルは、子どもの興味関心を集め、楽  
しむことができると評価された。3歳頃になると幼児は生活体験を遊びに再現することが多く  
なると言われている<sup>1)</sup>。したがって、実際に家庭や園で食べている野菜や果物を題材にすると  
興味や関心を集めることにつながるのではないと思われる。加えて、神経衰弱のように記憶  
力を使ったゲームも楽しめるということが分かった。一方、すぐろくやサイコロといった「数」  
を使ったゲームは、理解が難しいことが分かった。栄養士養成課程で、子どもの数字や文字の  
習得時期について、学ぶ機会はない。今後、食育媒体だけでなく、食育を実施する際にも文字  
や数字について、何歳くらいから興味を持ち、理解するかなどを知っておく必要があると思わ  
れる。また、3歳児以上になると身体機能の発達に伴い手指の動作が複雑になり、活動の幅も  
広がる。紙で作ったものは、ラミネートなどで補強し、媒体の強度を高めることが重要だと指  
摘があった。幼児が扱う際、壊れないように強度を高めておくように工夫し、子どもが繰り返  
し遊べるような媒体にすることが重要である。

4歳児以上の媒体は、子どもの興味関心を集めるという点で、他の年齢に比べて高い評価で  
あった。発達の過程において、カルタなど言葉を使って考えさせたり、三色食品群で食品の仲  
間分けをしたりなど、仲間と遊びながら学べる媒体であることが評価された。しかし、遊んで  
いるうちに子どもが慣れてくるとだんだん興味を示さなくなる可能性が指摘され、子どもがよ  
り長く遊ぶようにするための工夫が必要であることがあげられた。例えばカードの枚数を増や  
したり、果物だけでなく野菜を追加したりするなど徐々に難易度が上がるよう変化をつけると  
良いといった具体的な改善点が示された。また、4歳頃になると文字に興味を持ち、ひらがな

が読めるようになる子どももいる。そのため文字の使用は4歳頃からが望ましく、タイミングよく取り入れることが重要であることが分かった。

以上のように幼児期の食育媒体を製作するにあたり、認定こども園職員から意見を聞くことによって具体的な改善点と課題が明確になった。栄養士養成課程科目の中で、幼児の発育・発達について学ぶ科目は、「応用栄養学」や「解剖生理学」など一部の限られた科目である。また、実際に幼児の姿を観察する機会はほとんどない。したがって、発育・発達過程における幼児期の特性について、子どもの姿をイメージしながら捉えることは難しいと思われる。保育所栄養士の抱えている「子どもの発達が分からない」という不安に対して、鎌田ら<sup>7)</sup>は、栄養士養成課程では、栄養に重点を置いて学ぶため、子どもの身体的・精神的・社会的発達と食事援助という側面について学びが浅いことが問題であると指摘している。したがって、今後の授業の中で日常の子どもの姿を豊かにイメージできるよう幼児の発育・発達に着目した取り組みを強化することが必要である。また、発達段階に合わせた安全面への配慮や使用する素材についても検討することが課題としてあげられた。

## 5. まとめ

今回、栄養教育・指導論実習の授業改善を目的として、製作した幼児の食育媒体について、認定こども園職員（保育士、管理栄養士、栄養士、看護師）を対象にアンケート調査を行い改善点や課題を分析した。その結果、年齢が低くなるほど適した食育媒体を作ることが難しいことが明らかとなった。また、子どもの発育・発達のとらえ方について具体的な改善点や課題が明確になった。これらの結果を参考に今後の授業改善に活かしていきたい。また、今回製作した媒体は実際に子どもたちが使って遊んだわけではなかった。したがって、実際に子どもたちが使って遊んでいる様子を観察し、さらなる食育媒体の開発に繋がられるようにしたい。

## 参考文献

- 1) 保育所保育指針 厚生労働省 (2017)
- 2) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 内閣府 (2017)
- 3) 幼稚園教育要領 文部科学省 (2017)
- 4) 令和元年度版食育白書 第2章第4節就学前の子供に対する食育の推進, 70-75農林水産省 (2020)
- 5) 乳幼児栄養調査 厚生労働省 (2015)
- 6) 西尾久美子, 佐藤理紗子, 小塚美由紀, 杉村留美子: 保育所における「食」に関する現状と栄養士への要望についての研究, 北海道文教大学研究紀要37 9-15 (2012)
- 7) 鎌田久子, 富永暁子, 並河香代子, 小野友紀: 保育所栄養士への教育的支援の検討~新任栄養士の仕事上の悩みに着目して~, 人間生活文化研究 Int J Hum Cult Stud.29 573-580 (2019)
- 8) 辻村明子, 久保薫: 保育所・幼稚園における食育実践状況に関する統計的レビュー, 青森中央短期大学研究紀要 28 85-92 (2015)

- 9) 樋口耕一：テキスト型データの計量的分析－2つのアプローチの峻別と統合－，理論と方法 19（1）101－115（2004）
- 10) 末吉美喜：テキストマイニング入門，オーム社（2020）
- 11) 消費者安全調査委員会：「消費者安全法第23条第1項の規定に基づく事故等原因調査報告書概要 玩具による乳幼児の気道閉塞事故」[http://www.caa.go.jp/policies/council/csic/report/report\\_013/pdf/report\\_0](http://www.caa.go.jp/policies/council/csic/report/report_013/pdf/report_0)（2017）

